

## 世界史 B (2年) 4/27~5/1 の学習内容②

### (1) ローマ=カトリック教会の組織

西ヨーロッパでは、西ローマ帝国が 476 年に滅亡しました。

だけど、ローマ市を拠点とする「ローマ=カトリック教会」という聖職者の組織は残ったということ、今までの解説で学んできましたね。

とはいえ、自分たちを守ってくれる「西ローマ皇帝」がいなくなってしまったため、ローマ教会は、大変心細い思いをしてきました。東ローマ皇帝はあまりに遠くにいたので、いないよりはましですが、あまり頼りになりません。

そんなわけで、ローマ教会はフランク王国と結びついて、カール大帝に西ローマ皇帝の帝冠を授与しました。フランク王国の分裂後は、ドイツ王のオットー 1 世にローマ皇帝の帝冠を授与して、ドイツは「神聖ローマ帝国」と呼ばれるようになりました。

このローマ教会は、それぞれの国とは別に存在する、「西ヨーロッパ全域に広がる聖職者組織」です。資料集 P143 1 の図を見てみてください。

現代の企業でも、「会長→社長→専務→常務→部長→課長→係長→主任」みたいな、役職の階層があっさりしますね。ピラミッドみたいに、上に行くほど、偉く、少なくなるやつですよ。

これと同じで、「ローマ教会」にも、役職の序列があるんです。図を見てもらうとわかるように、上から「教皇 → 大司教 or 司教 or 修道院長 → 司祭」という、階層性組織になっています。

「修道院」というのは、6 世紀に生まれたキリスト教の運動の拠点です。教科書 P150 の内容ですが、ここで学んでおいた方が分かりやすいと思うので、ちょっと触れてみましょう。

聖職者は、「洗礼」（キリスト教徒の一員に加える）や、「婚姻」「終油」（死の際に油を塗る）など、様々な儀式を信徒にしてあげる必要があるのも、普通は町や村の教会に住んでいます。

ところが、町は誘惑も多いところなので、中には権力者と結んで、金や欲望や地位を追い求める聖職者も出てくるんですね。

そんな「腐敗」に反発し、「人里離れた場所に住み、キリスト教の教えである『清貧』にもとづく、厳しい生活を過ごそうという人々が現れました。彼らの作った組織が「修道会」、その一員を「修道士」、施設を「修道院」と呼びます。

西ヨーロッパで本格的な修道院を作ったのは、6 世紀のベネディクトゥスという人です。

彼は、イタリアで「ベネディクト修道会」を結成して、人里離れた山の上に「モンテ=カシノ修道院」を設立し、「清く貧しい生活」を実践しました。

モットーは「祈り、働け」というもので、修道士たちは、祈りと労働に 10 時間以上を費やす、修行の日々を過ごしました。この修道会は、西ヨーロッパの修道院運動の出発点になります。

## (2) ローマ教会の腐敗と改革

先ほど、ローマ＝カトリック教会は「階層性組織」になっている、ということ学びました。それでは、どんな人が大司教や司教になれるんでしょうか。

神聖ローマ帝国では皇帝が聖職者を任命する権利（聖職叙任権）を持っていました。「保護してやるが、聖職者組織は私が仕切る。」というわけです。「帝国教会政策」と呼びます。

教皇や大司教や修道院長は、ただ教会のなかで偉いというだけではなく、ローマ教会に寄進された荘園の所有者でもありました。高位聖職者は、同時に領主でもあるんです。すると、どんなことが起こるでしょうか？

あるところに有力な貴族がいて、長男に後を継がせるとします。でも、実は次男の方がかわいい。そんな時は、次男に大司教の地位を与えてもらえば、1代限りですが次男も領主になれるんです。

神聖ローマ皇帝は、この状況を利用していました。中世ヨーロッパでは、貴族が皇帝や国王の言うことをあまり聞かないので、「わたしの言うことを聞けば、君の息子に大司教の地位をあげる（かもしれないよ）」みたいな感じで、国内の統治に聖職叙任権を利用するわけなんですね。

ところが、こんな風に決まった高位聖職者って、強い信仰心や道德意識を持っていると思いますか？残念ながら、そうでないことが、多かったんです。

聖職者は独身が原則なんですが、もともと領地欲しさで聖職者になった人たちが少なくないので、妻子を持ち、贅沢な暮らしを満喫する、といった聖職者も多かったのです。

高位聖職者なのにキリスト教の教えを守っていない。言っていることとやっていることが違う。こういう組織は、信頼と求心力を失います。人々の間では、教会への不満が高まっていました。

このような聖職者の腐敗が進む中で、再び修道院に注目が当たるようになります。11世紀に修道院運動の中心になったのは、フランスの「クリュニー修道院」でした。

クリュニー修道院は、厳格でゴージャスな儀式や、祈りで満たされた生活による威厳で、貴族や他の聖職者を圧倒し、11世紀の西ヨーロッパにブームをもたらしたのです。

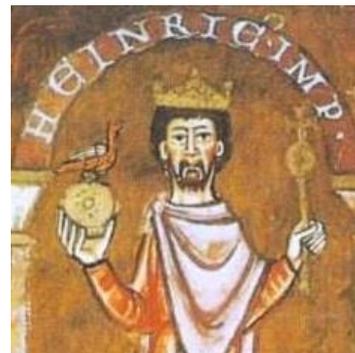
「そうそう、これが本当のキリスト教だよ！」という雰囲気です。

この流れにのって、教皇も「ローマ＝カトリック教会の改革」に乗り出しました。その代表者が、教皇グレゴリウス7世です。この人は超重要です。資料集 P143 右上の人です。

彼は、「ローマ＝カトリック教会が求心力を高めるには、教皇が『聖職叙任権』を握るしかない。」と考えていました。

それに対して、当時の神聖ローマ皇帝のハインリヒ4世は、猛烈に反発します。教皇と皇帝との間に起こったこの対立を、「叙任権闘争」と呼びます。

右がハインリヒ4世の肖像です。



ハインリヒ4世はグレゴリウス7世の廃位を宣告しますが、グレゴリウス7世は、そんなハインリヒ4世に対し、「破門」で対抗しました。「キリスト教徒の集団から追放する」という意味です。廃位宣告か、破門か。この対立を決したのは、周囲のドイツ諸侯（貴族）でした。

ハインリヒ4世は貴族たちに人気のない皇帝で、貴族たちはここぞとばかりに、皇帝に反旗を翻したのです。

「皇帝って、キリスト教徒じゃなくなったんだって。」

「じゃあもう従わなくていいよな。反乱する？」

・・・こんな軽い感じではないかもしれませんが。

あわてたのは、ハインリヒ4世です。はやく破門を解いてもらわないと、皇帝としての彼の人生は終わりです。

ハインリヒ4世は、教皇が滞在していたイタリアのカノッサに駆けつけましたが、相手にしてもらえません。雪が降る中、粗末な身なりで3日3晩謝罪を続け、ようやく波紋を解除されました。

この出来事を、「カノッサの屈辱」と呼びます。

破門を解かれたハインリヒ4世は、反抗した貴族を罰し、グレゴリウス7世を軍事力で攻めたたえました。グレゴリウスは怒りのために憤死します。一見、ハインリヒ4世の勝利に見えますね。

しかし、「皇帝が教皇に謝罪した」という出来事は、人々の心に大きな影響を残しました。「カノッサの屈辱」後、皇帝を謝罪させた教皇の権威は、どんどん大きくなっていったのです。

### (3) 教皇権の絶頂

1095年、教皇ウルバヌス2世の呼びかけによって、イスラーム勢力が支配する聖地エルサレムを占領しようとする「十字軍」が始まりました。当時の状況は、フリーの4コマまんが「世界史のまんが」で見られます。<http://rank119.gozaru.jp/img/kan.html> の3つめです。

キリスト教への熱烈な思いが高まっていく中で、教皇の意向を、貴族も、国王も、皇帝も無視できない。そんな雰囲気、西ヨーロッパを包んでいきました。

ドイツ（神聖ローマ帝国）では、皇帝と教皇との間に「ヴォルムス協約」が結ばれ、皇帝が教皇の聖職叙任権を認めました。叙任権闘争は、教皇の勝利に終わったのです。

そして13世紀、「中世最強の教皇」と呼ばれる、インノケンティウス3世が登場します。右の肖像です。

彼は、神聖ローマ帝国、フランス、イギリスの君主を、全員破門し屈服させました。教皇はまさに、西ヨーロッパ社会の頂点に立ったのです。

インノケンティウス3世の言葉に、「教皇は太陽、皇帝は月」というものがあります。「皇帝の輝きは、教皇あってのもの」という意味です。彼の自信を表していますね。

